

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 15 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380869

研究課題名(和文) 幼児・児童期の他者理解：社会的文脈での感情会話・コミュニケーションに着目して

研究課題名(英文) Social understanding during early and middle childhood: Emotional discourse and social communication

研究代表者

岩田 美保 (Iwata, Miho)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：00334160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児・児童期の他者理解について、社会的文脈での感情会話・コミュニケーションに着目し検討した。具体的には(1)幼児間の仲間遊びでの感情語言及や、葛藤状況を中心とした調整的やりとりについて検討した。(2)小学校児童が、葛藤を伴う、あるいは葛藤経験についての話し合い場面において、どのように調整的やりとりを行っていくか検討した。(3)家族の夕食時の感情会話について、葛藤経験を再解釈する上での3世代を含めた家族(母や祖母)の媒介によるサポートに着目し、検討した。総じて、こうした園・学校・家庭での感情会話・コミュニケーションが幼児・児童期の他者理解に果たす役割の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the developmental processes of social understanding during early and middle childhood by focusing on emotional discourse and social communication. We gathered naturally occurring emotional states and verbal expressions as part of close relationships with friends and family from unstructured observations. We focused on (1) preschool children's verbal communications including internal emotional states and the practical aspects of regulating conflicting situations in peer play; (2) school children's verbal communications in the classroom discussions, regulation of negative emotions during conflicts, and reflecting on the past conflicting situations; (3) family communications at dinnertime where family members discuss negative emotional experiences and children re-interpret these experiences by mother's and grandmother's support. The results highlighted the significance of emotional discourse and social communications in children's social understanding.

研究分野：発達心理学

キーワード：他者理解 感情 会話 葛藤調整 コミュニケーション 仲間遊び 話し合い 三世代

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、幼児の他者理解は J.ピアジェによる三つ山課題を用いた検討や、その後のいわゆる「心の理論」に関わる一連の研究を中心とする、実験的な検討 (J.Piaget; H.Wimmer & J.Perner; 子安、等) を中心に検討がなされてきた。特にここ数十年における「心の理論」研究における誤信念パラダイムを用いた検討では、概ね4歳ごろに1次的信念の理解、その後、児童期中期にかけて、2次的信念の理解が可能になることが指摘されてきた。こうした研究の進展に対し、彼らが、日常的な文脈の中でどのように他者理解能力を発達させていくかという点については、焦点的な検討は少なく、未だ十分に検討されていない現状がある。

一方、「心の理論」研究との関わりの中で、1980年代頃から、幼児が、2歳頃から日常性の文脈において自他の欲求や感情などの内的状態について言及し始める中で、(Bretherton & Beeghly, 1982; Dunn, Brown, & Beardsall, 1991 等)、身近な他者との日常的な言語的やりとりが、子どもの他者理解に極めて重要な意味をもつ可能性が長く指摘されてきた。近年では、言語発達の側面が、他者理解の発達において重要な役割を果たしている可能性が改めて指摘されつつある (Astington, 1999, 2005; 内藤, 2007)。

こうした中で、近年、「感情」言及を含む会話や相互のコミュニケーションが他者理解において重要な基礎となりうる可能性が改めて強調されている (Lagattuta & Wellman, 2002; Dunn & Brophy, 2005)。特に、「ネガティブ感情経験」についての家族間の会話や、園や学校での葛藤状況でのやりとりでは、そうした状況を解決し、再発を阻止する上で、子ども同士の感情言及を含む多様なコミュニケーションが生じることが示唆されている。そうしたコミュニケーションは、他者感情理解や自他の感情調整と密接に関わり、他者理解の基盤として大きな意味を持つ可能性が示唆される (Lagattuta & Wellman, 2002; Dunn, 2008; 久保, 2010)。しかしながら、社会的文脈での「感情」言及を含む言語的やりとりについて幼児期から児童期にかけて検討した研究は少なく、基礎データの蓄積が待たれるところである。

総じて、葛藤状況にかかわるやりとりを含め、家庭や学校、園といった社会的文脈での子どもと家族や仲間との感情に関する会話・コミュニケーション(社会的相互交渉)に総合的に焦点をあてながら、幼児期から児童期にかけての他者理解の発達過程を明らかにしていくことは極めて重要といえる。

## 2. 研究の目的

本研究の大きな目的は「幼児・児童期の他者理解」について社会的文脈での感情に関する会話・コミュニケーションに着目し、発達的な検討を行うことである。具体的には、以

下の3点である。幼稚園児の仲間遊び場での自他の感情(特にネガティブ感情)への言及を含むやりとりについて検討する。小学校の低～高学年の特別活動の授業等での児童間の話し合い場面に着目し、特に葛藤状況でのネガティブ感情を含む意見表明やそこでのやりとりについて検討する。家族間の食事場面での感情(特にネガティブ感情)経験に関する会話のやりとりを3世代家族の会話も含めて検討する。これらの社会的文脈での感情会話やコミュニケーションをふまえ、幼児・児童期の他者理解の発達について考察する。

## 3. 研究の方法

### (1) 幼児における仲間間の感情会話の検討

首都圏の幼稚園において、継続して観察を行った。平均して月に2回程度、朝の自由遊び時間(約2時間)における室内及び、園庭での2名以上の各年齢クラス(3歳児～5歳児クラス)の園児同士のやりとりについて縦断的観察を行った。観察方法は、筆記記録を中心とし、毎回フィールドノートを作成した。また、状況に応じてボイスレコーダーによる音声記録をとった。これらから、幼児間の言語的やりとりのデータを構築し、それぞれの園での仲間遊びにおける感情言及をとまなうやりとりについて内容分析を行った。

### (2) 小学校での児童間の感情会話の検討

首都圏の小学校において、高学年学級(5年生の1クラス(39名)及び6年生の1クラス(39名))の特別活動の時間の話し合い(各40分)について観察を行った。5年生学級では、前期・後期ごとに児童たちから、問題提起がなされ、改善にむけた話し合いが行われる状況に焦点化して観察を行った。6年生学級では、話し合い活動の定期的な観察を行った。観察方法は、映像記録(6年生学級のみ)及び、音声記録と筆記記録を併用した。これらからプロトコルデータを作成し、特に葛藤を伴う話し合いにおける児童の意見表明やコミュニケーションについて検討した。

### (3) 3世代を含めた家族間の感情会話の検討

3世代家族の観察データの収集とプロトコル化を行った。観察方法は非参加観察であり、家族に食堂にビデオカメラを設置してもらう形での撮影を依頼した。なお家族の都合を最優先にしたため、観察回数や、観察期間、インターバルについては、無理をしない形で行ってもらい、複数の家族の縦断的データを蓄積した(一部観察継続中)。これらのプロトコル化を進めるとともに、これまでにプロトコル化の済んでいる、祖母と小学生を含む1年間の会話データに基づき、核家族と異なる3世代家族の感情会話の特徴等について焦点をあてた分析を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 幼児の仲間遊びにおける感情会話・コミュニケーション

###### 仲間遊びで語られる感情語

やりとりでの感情言及を捉える手がかりの一つとして、3、4、5歳児クラス児の仲間遊びで語られた感情語の語彙の種類や言及量が年齢段階によってどのように異なるのかについて検討した。感情語の種類(数)(Table1)としては、3、4、5歳児クラス間で大きな違いはみられなかったが、4、5歳児クラスでは、ネガティブ感情に関わる語彙の幅が広がる傾向が窺われた。また、各年齢クラスでのポジティブ感情・ネガティブ感情・ニュートラル感情に関わる感情語への言及数を比較したところ、4歳児クラスではネガティブ感情が有意に多く語られ、ニュートラル感情への言及が有意に少ないこと、一方、5歳児クラスでは、ニュートラル感情への言及が有意に多い傾向が窺われた(Table2)。これらの結果から、4歳児クラスでは、葛藤を含むネガティブな感情言及を含んだ関わりが3歳児クラスと比べて仲間遊びの中でより大きな位置を占めるようになってくることが窺われた。一方、5歳児クラスでは、仲間同士の遊びやそこでのやりとりの質がそれまでと比べて変化し、ニュートラル感情に関わる言及を含んだより多様なやりとりがなされるようになる可能性も窺えた。

Table1. 観察された感情語の種類数

	ポジ	ネガ	ニュートラル	合計
3歳クラス	11	8	6	25
4歳クラス	9	15	2	26
5歳クラス	8	14	8	30

Table2 観察された感情語の言及総数

	ポジ	ネガ	ニュートラル	合計
3歳クラス	28 (32.9)	35 (41.2)	22 (25.9)	85 (100.0)
4歳クラス	44 (41.9)	55 (52.4)	6 (5.7)	105 (100.0)
5歳クラス	23 (30.7)	29 (38.7)	23 (30.7)	75 (100.0)

注1. カッコ内は割合。

注2. は有意に多いこと、は有意に少ないことを示す。

###### 仲間遊びでの葛藤調整的なやりとり

仲間遊びの中での葛藤調整的なやりとりを質的に捉えるために、ネガティブ感情言及を含んだやりとりの増加が想定される(上記参照)4歳女児たちが一人の仲間の葛藤状況にどのように対応するかに着目し、事例的検討を行った。やりとりでは、ごっこ遊びのための製作(コップなど)中、赤のクレヨンがないことに気づき、葛藤を抱える状況となったAに対し、仲間が自分のクレヨンを差し出す、別の仲間に代弁する、ネコ役のAにやさしく尋ねる、状況を変え得る『引っ越し』を提案する、といった言動に加え、

ポジティブな気持ちへの切り替えを促す(「楽しいことを思い出して行きましょ!」「すっきりした気持ちで行きましょ!」)といった感情言及を含むやりとりがなされ、Aもそれらに応じすねながらも歌を口ずさむ、すねた様子ではあるが従う、といった様子が見られていった。

こうしたやりとりからは、ふり遊びの準備

製作がごっこ(ふり)遊びに展開していく中で、いわゆる「心の理論」能力の変換期にある4歳児クラスの女児たちが現実世界とふりの世界の境界線を行き来しながら、Aの感情に言及し、またAの気持ちを立て直すべく、洗練された自律的な対処を行っていることが窺われるものといえた。こうした現実とふりを自由に行き来できる、仲間遊びならではの状況をふまえ、感情言及や葛藤調整の検討を行うことの重要性が示された。

###### 仲間遊びでの意図しない行動で生じた葛藤とその解決

物や場所の取り合い等とは異なり、ある子どもの何らかの意図しない行動が仲間にとって意にそぐわないと捉えられたことが原因で生じたと推察されるやりとりでは、意図や目的が明確とはいえないという点で解決の困難さが予測される。こうした点に着目し、葛藤解決の様相を事例横断的に検討した。3歳クラス児の事例からは、楽しいからこそ生じるジレンマ状況の中で、自他の状況や立場の違いに気付くようなやりとりがなされている様子が窺われた。4歳クラス児の事例では、仲間間の過去の経験もふまえ、自分たちで解決しようとする様子が窺えたが、他方で、相互合意的な解決とはいえない難しい方略もみられるようになることも窺えた。5歳クラス児の事例では、葛藤を解決する上で、ルールの共有や維持ができることが重要となり、そうした説明や自己の立場に関わる言語的なやりとりを含む、相互的な調整的やりとりがより洗練されてくることが窺えた。今後は、仲間同士の継続的な関係に着目しながら、子ども同士の葛藤解決の試みについて検討を行っていく必要が示唆された。

###### 幼児の仲間遊びでの関係調整に関わるポジティブ感情言及

関係調整においては、ネガティブ感情のみならず、ポジティブ感情への言及も重要と考えられる。こうした観点から、3~5歳クラス女児たちの仲間遊びでのポジティブ感情に関わる言葉としての「かわいい」への言及に着目し、同言及を通じ女児たちがどのようなやりとりを行っているかについて検討した。その結果、3歳クラス女児間では、仲間との遊びの開始や、遊び内外での良好な仲間関係の維持に繋がり得るものとして「かわいい」への言及がなされている様子が窺われた。4歳クラス女児間では、「かわいい」への言及が仲間遊びの精緻化や、その楽しさや遊戯性を高めるものとしてより焦点的に用いられるようになってくることが窺われた。一方、5歳クラス女児間では、特別なルールや、他者に関わる視点を伴うものとして、また、グループ内・間の遊びの融合や発展につながり得るものとして「かわいい」への言及がなされるようになってくることが窺えた。特に「かわいい」への言及を通じた賞賛が、5歳

女児間の社会的交渉場面で効果的に用いられていることは、5歳女児間の関係調整のあり方の一特徴が窺い知れる点で、興味深いものといえる。総じて「かわいい」への言及が彼らの良好な関係調整に一定の役割を果たしている可能性が示唆された。

## (2) 学校での児童間の感情会話・コミュニケーション

2年生・5年生の葛藤状況での話し合い

不満や葛藤を伴う話し合い場面において、児童は、関係や自他感情を調整すべく、どのようにそれらを言語的に表現し、やりとりを行うのであろうか。

こうした点について、2年生学級及び、5年生学級の特別活動の話し合いにおいて葛藤状況が生じていたと考えられるグループ・ペアの話し合いに着目し、ネガティブ感情を含む意見をどのように表明し、やりとりがなされていくかについて検討を行った。その結果、葛藤状況での話し合いにおいて、ネガティブ感情を含んだ意見を良好な形で表明し、やりとりを調整的に行うことが、2年生は過渡期にあるが、高学年期の5年生ではそれらが可能になってくることが窺えた。

5年生学級での葛藤状況(テーマ:自習時のおしゃべり)での話し合い

5年生学級での葛藤状況での話し合いに感情調整の観点から焦点をあて、葛藤状況の見直しと、自他の感情的側面に焦点をあてた対処としてどのような言及がみられるかに着目し、検討を行った。

葛藤状況の見直しについては、児童たちから問題提起された、「『おしゃべり』をする人がいた」という葛藤状況が、課題が終わったあとに別の課題を自主的に行おうとする一部の児童の行動から、それを注意しようとする周囲の行動が広がっていったことが一つの原因であり、各児童のやる気や善意に基づいた行動の食い違いによって生じた部分も少なくなかったことが、議長や教師、また、「なるほど」「ああー」といった納得を示すような「何人かの声」も含んだやりとりの中で明らかになっていった。

一方、今後こうした葛藤状況が起こらないための対処について、やりとりでは、問題提起をした児童を中心とした、「そもそも話さないようにする(A案とする)」という意見に対し、「それができずに話してしまうのであり、それを防ぐためにどうすべきか(B案とする)」という意見が述べられていった。そうした中で、自他の感情的側面をふまえた具体的対処としては、B案に対応し、今後うるさくする人がいた場合を想定した、ルールを順守させるために、感情的な罰を与える(a, Table3)といった対処や、上記の経験の見直しをふまえ、やさしく言う(注意する)ことで当事者の感情を調整し、葛藤状況への発展を防ごうとする対処(b, Table3)等が挙

げられた。一方、A案に対応する具体的対処としては、上記の経験を見直し、級友たちの感情や行動(「あまりにもおもしろすぎて周りの人がどんどん加わっていく」)をふまえ、「最初から無視する」といった対処(Table3, c)等が挙げられた。

Table3.話し合いで合意的に語られた感情的側面をふまえた対処

[a.感情的な罰に関わる対処]
・「うるさくした人はおあずけみたいにする。だからうるさくした人はさびしくなるからいいかなと思って」
[b.当事者の感情調整に関わる対処]
・「やさしく言えば解決するんじゃないかなって思った。強く言うから、うっぜーとか、こいつうっぜーとかかって、よりうるさくするんじゃないかなって」
[c.当事者や周りの感情や行動に関わる経験をふまえた対処]
・「(隣のひと(一部略))本人が話していて、あまりにもおもしろすぎて周りの人がどんどん加わっていくからうるさくなるのであって、だから、最初の方で、なんかしゃべるっていう行為があったときには、ちょっと一部の人は反論するかもしれないけど、話しかけられても返事をしないで無視することが必要だと思います」

これらは5年生児童たちが、話し合いのやりとりを通じ、具体的な級友等の日常的な行動や感情、またそれらに関わる経験を見直す中で、それらをふまえながら、感情調整的な対処も含むさまざまな対処を効果的なものと捉え、適用していこうとする様子が窺われるものとして興味深いものといえる。

## (3) 3世代を含む家族間の感情会話・コミュニケーション

母子間のネガティブ感情経験の調整的な対処や解釈に関わるやりとり

A(長男、小3)とB(長女、小2)とC(次男、年中)のきょうだいを含む母子4者間の夕食時の会話において、ネガティブ感情経験の調整的な対処や解釈に関わるやりとりがどのようになされるかについて、4年間の縦断的検討を行った。母子の会話では時期を通じ、対人間トラブルや他者への心配など、対人間で生じたネガティブ感情経験が多く語られた。そうした経験に対する調整的な対処や解釈に関するやりとりでは、言及内容の推移傾向は明確には捉えにくかったものの、4期にかけて、ポジティブな対処(【ポジティブ対応】)や、経験の再解釈(《再解釈》)が、より母子間で語られるようになる傾向が窺えた。さらに、対人間トラブルを中心とするやりとりに焦点をあててその変化をみたところ、1期では母主導で《再解釈》言及がなされていたが、2期以降では、対象児たちの《再解釈》言及に対する母の修正意見を含むやりとりや、4期では、より対象児たちに直接かかわる経験に焦点化した形で母子4人の《再解釈》言及に基づいたやりとりがなされるようになる様子が窺えた。総じて、ネガティブ感情経験に関する母子4者間のやりとりは、それらの経験に調整的に対処し、解釈を行う上で、また、学童期を通じた感情理解において極めて重要な意味をもつことが示唆された。

### 3世代の感情経験に関する会話

学童期の3人きょうだい(A(長男,小5)・B(長女,小4)・C(次男,小1))と祖母(父方の祖母)と母の1年間の会話のやりとりにおいて、祖母が、きょうだいやきょうだいに関わる母の感情経験に対し、特に、自身の感情経験を挙げながらコメントしたやりとりに焦点をあて事例的検討を行った。そこでは祖母が、母の疲労や感情状態を読み取り、子どもたちに代弁することや、怒りに伴う身体的リスク(「血管がバーンって破裂したら大変だよ、怒って」)、「怒ると血管が切れると嫌なのでやめる」等)をふまえ、自身の感情調整に関わる経験知を母子に向けて言及していく様子が窺われた。こうしたことから、3世代の感情経験についての会話では、祖母ならではの経験知を含む発言やそれによるやりとりの媒介が、母子間の感情調整にさまざまに影響を及ぼしている可能性が推察された。

#### (4)まとめと今後の展望

総じて本研究では、葛藤状況を中心に、子どもが園や学校の仲間や、家族とどのような感情会話・コミュニケーションがなされるかについて質的分析も含め検討してきた。

幼児の仲間遊びでのやりとりに関わる分析結果からは4歳ごろから感情コミュニケーションの様相が変化してくることが推察された。すなわち、4歳ごろからは、仲間遊びで語られるネガティブ感情語の語彙が増加することや、現実とふりの世界をも行き来しながらの調整的なやりとりがみられるようになること、また、目的や意図が明確ではないことで生じた(その背景がわかりにくい)葛藤状況に対しても、当該の状況に関わる仲間も含めた過去の経験等もふまえ、教師の手を借りずに自主的に調整的な解決にむけたやりとりが行われる様相もみられてくることが窺えた。他方で、同時期には、仲間同士の関係性や立場をふまえ、相手の心情をあえて読み取らないといった、相互合意的ではないやりとりがあえてなされるようになる様子も窺えた。4歳ごろは「心の理論」の獲得期であり、そうした時期に葛藤状況に関わる感情コミュニケーションがより複雑・多様化することが推察されたことは、その相互的な関連性が示唆されるものとして、興味深いことである。今後は、特に4歳前後期において、ネガティブ感情語が用いられる状況がどのように発展していくのかという点を含めた、感情コミュニケーションの現状についてより詳細に検討していく必要がある。

一方、こうしたネガティブな感情や葛藤に関わるやりとりに対し、ポジティブな感情言及(「かわいい」)を含むやりとりが特に幼児間の関係調整に一定の役割を果たしていること、さらにその様相が幼児期を通じて変化していく可能性が示された。こうしたポジティブ感情言及の調整的な役割は極めて重要と考えられ、今後さらに重点的に検討を行っ

ていく。

学校での葛藤状況に関わる話し合いでのやりとりの分析結果からは、5年生段階になると、仲間同士の話し合いのやりとりの中で、過去の経験を見直し、仲間の心情を考慮に入れた、葛藤状況の再発を防止するような対処を導き出すことが可能になってくることが推察された。これらは、高学年期にかけて可能となってくる2次の信念の理解との関連が推察されることであるが、学習指導要領改定案(2017)でも強調されている「主体的・対話的学び」の観点からも重要である。今後は、こうした意見がどういったやりとりから導き出されてくるのかについてコミュニケーションの縦断的変化の過程もふまえたより詳細な分析が必要である。

家庭での葛藤状況に関わるやりとりの分析からは、葛藤経験を再解釈する上で、子どもたちの年齢段階に応じた家族(母や祖母)との会話が重要な役割を担っている可能性が推察された。母子の会話では子どもたち(3人きょうだい)が幼児～中学年以下の時期には、母が主導的な役割を担いながら、ネガティブ感情経験の再解釈を行う様子が窺えた。一方、子どもたちが低学年～高学年になる時期には、母がより間接的な媒介者となり、きょうだいと母とがより対等に葛藤経験についてのやりとりを行うことが可能になっていく様子が示唆された。これらは、学校や友人に関わる経験が多様になる児童期の経験の見直しにおいて、子どもたちの年齢段階に応じた母の媒介が重要な役割を担っていることが推察される結果として重要である。

さらに、祖母が母子の会話に参加することで、その様相はさらに変化し、子どもたちに関わる感情経験に対する母の感情面のよみとりも行いながら、感情(怒りなど)と身体的な反応やリスクにも言及するなど、年長者としての立場から母子のより幅広い自他感情理解や感情調整に関わるやりとりを可能にしていることが示唆された。これらは3世代の会話ならではの感情会話の一特徴を示唆している点で重要である。一方、これまでの筆者の検討からは、3世代のやりとりではポジティブな感情がより多く語られ、強調される側面も窺える結果となっており、ポジティブ・ネガティブな面を含む3世代の感情会話については未だ検討の余地が多くある。今後より詳細な分析を行っていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

岩田 美保 母子4者間の夕食時の会話におけるネガティブ感情経験の調整的な対処や解釈に関するやりとりの縦断的検討. 日本家政学会誌, 査読有, 65, 2014, 531-546.

岩田 美保 園での仲間遊びにおける幼児の感情語への言及 - 3,4,5 歳児クラスのデータ分析 - . 千葉大学教育学部研究紀要, 査読無, 63, 2015, 1-6.

岩田 美保 高学年女子の友人関係における関わりの多様性と社会的発達 大学生女子の回想的自由記述をふまえて - . 千葉大学教育学部研究紀要, 査読無, 64, 2016, 43-48.

岩田 美保 園での仲間遊びにおける葛藤解決に関わるやりとりの事例的検討. 千葉大学教育学部研究紀要, 査読無, 65, 2017, 73-78.

[学会発表](計 15 件)

岩田 美保 幼児期の遊びにみられる発達: 幼児間の葛藤解決・関係性の違いをふまえて. 自主シンポジウム「遊びを囲む壁を越えて 遊び研究再考/再興」話題提供者(企画: 砂上史子, 松寄洋子, 司会: 松寄洋子, 話題提供者: 中野茂, 岩田美保, 砂上史子, 指定討論者: 島田将喜), 2017 年 3 月 27 日, 日本発達心理学会第 28 回大会, 広島市文化交流会館(広島)

岩田 美保 園での仲間遊びにおけるポジティブ感情言及と関係調整: 5 歳クラス幼児間の「かわいい」への言及に着目して. 2017 年 3 月 26 日, 日本発達心理学会第 28 回大会, 広島国際会議場(広島)

岩田 美保 3 世代家族の感情経験についての会話 - 祖母の感情調整に関わる経験知を含む言及が媒介する母子のやりとり - . 2016 年 10 月 15 日, 日本家族心理学会第 33 回大会, 聖徳大学(千葉)

岩田 美保・鶴島 規範 5 年生学級での葛藤状況に関わる話し合い-状況の見直しと感情的側面をふまえた対処がどのように話されるか-. 2016 年 10 月 8 日, 日本教育心理学会第 58 回総会, サポートホール高松・香川国際会議場(香川)

Miho Iwata The Context of Young Children's Utterances about Positive and Negative Emotions in Peer Play. 2017 年 7 月 27 日, 31st International Congress of Psychology(ICP2016), パシフィコ横浜国際会議場(神奈川)

岩田 美保 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討 6. 日本保育学会第 69 回大会, 2016 年 5 月 7 日, 東京学芸大学(東京)

岩田 美保 幼児・児童期の自己発達を支えるものとしての感情会話. 自主シンポジウム「ナラティブと自己の発達」話題提供者(企画・司会: 田中みどり, 企画: 高橋登, 大伴潔, 小林春美, 話題提供者: 岩田美保, 小松孝至, 仲野真史, 指定討論者: 森岡正芳), 2016 年 5 月 1 日, 北海道大学(札幌)

岩田 美保 園での仲間遊びにおけるポジティブ感情言及と関係調整 3, 4 歳クラス幼児間の「かわいい」への言及に着目して - . 2016 年 5 月 1 日, 日本発達心理学会第 27 回大会, 北海道大学(札幌)

岩田 美保 4 歳児クラス幼児間の仲間遊びにおける感情調整 1 人の子どもの葛藤状況に仲間はどうに対処するか . 2015 年 8 月 26 日, 日本教育心理学会第 57 回総会, 新潟大学(朱鷺メッセ)(新潟)

岩田 美保 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討 5. 2015 年 5 月 9 日, 日本保育学会第 68 回大会, 椋山女学園大学(愛知)

岩田 美保 児童期の情動制御(感情調整) - 学級での葛藤状況における児童間の感情表明を通して - . 自主シンポジウム「情動制御の発達: 生涯発達を軸に」話題提供者(企画者: 上淵寿, 利根川明子, 話題提供者: 坂上裕子, 岩田美保, 石井佑可子, 榊原良太, 指定討論者: 遠藤利彦), 2015 年 3 月 21 日, 日本発達心理学会第 26 回大会, 東京大学(東京)

岩田 美保 園での仲間遊びにおける 3,4,5 歳児クラス児の感情語への言及 . 2015 年 3 月 20 日, 日本発達心理学会第 26 回大会, 東京大学(東京)

岩田 美保・古重 奈央・鶴島 規晃 児童間の葛藤状況での話し合いにおけるネガティブ感情を含む意見表明: 5 年生グループ及び 2 年生ペアのやりとりに着目して . 2014 年 11 月 8 日, 日本教育心理学会第 56 回総会, 神戸国際会議場(兵庫)

岩田 美保 小学生を含む 3 世代家族の感情会話: 異なる話者間でポジ・ネガ感情への言及文脈がどのように変わるか . 2014 年 26 年 9 月 12 日, 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学(京都)

岩田 美保 園での仲間遊びにみる他者理解に関わるやりとりについての検討 4. 2014 年 5 月 17 日, 日本保育学会第 67 回大会, 大阪大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学(大阪)

[図書](計 2 件)

岩田 美保(共著) 飯永 喜一郎・岩立 志津夫編 福村出版, 新・発達心理学ハンドブック, 2016, 分担執筆箇所: 4 節, 2 章「自然観察法」, pp819-823.

岩田 美保(共著) 小山 高正・田中みどり・福田 きよみ編 川島書店, 遊びの保育発達学, 2014, 分担執筆箇所: 「遊びと感情表現」, pp47-70.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 美保 (IWATA, Miho)  
千葉大学・教育学部・教授

研究者番号: 00334160